



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『日葡辞書』の才段長音開合表記の混乱について
Author(s)	呉, 美寧
Citation	国語国文研究, 111, 58(1)-47(12)
Issue Date	1999-03-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94700
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_111_58-47.pdf



『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱について

呉 美 寧

* キーワード：『日葡辞書』、オ段長音、開合の混乱、バ・マ行四段動詞の音便形

I. はじめに

II. 『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱

III. 『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱用例の周辺

1. 名詞用例から：オ段音に—uo が続く場合の表記について
2. 副詞用例から：形容詞ウ音便形の取り扱い方について
3. 動詞用例から：バ・マ行四段動詞の音便形にだけ用例が見られることについて

IV. まとめ

I. はじめに

オ段長音は、室町時代には開音と合音の二種類が存在していたが、室町時代末期には混乱を見せ、江戸時代の元禄頃までには合一して今日に至った、という。

オ段長音の開合については、橋本進吉博士以来多くの先行研究がある。本稿は、これらの先行研究をふまえた上で、オ段長音の開合が混乱を見せる室町時代末期の文献である『日葡辞書』を対象として、その開合表記の混乱について考察しようとするものである。まず、混乱の状況を語種の面、開合の統合の方向から分析し、その結果を『天草版平家物語』や『天草版伊曾保物語』の開合表記の混乱の状態とも比較してみる。また、混乱の用例を通して見られる『日葡辞書』のオ段音に—uo が続く語の表記の特徴や形容詞ウ音便形の取り扱い方、そして、ア・ハ・ワ行四段動詞とバ・マ行四段動詞の音便形を作る際の相違についても考えてみたい。

II. 『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱

『日葡辞書』の見出し語、32,293 語の中、オ段長音の開合と関連のある見出し語^{*1}は、約 6,450 語である。この中、開合の表記が混乱しているものは、262 語である^{*2}。開合

^{*1} ろ・おを含む語、o となっているが ろ・お であるべき語、を指す。

^{*2} 調査は、オックスフォード大学ボードレイアン図書館本による。(亀井孝解説(1975)『日葡辞書』勉誠社(初版1973))『日葡辞書』は写本の間に開合表記の異同が見られる。特に、パリ国立図書館本とボードレイアン図書館本との異同に関しては、石塚晴通(1976)の指摘がある。

の表記が混乱しているというのは、開音表記が期待されるところが合音表記になっているものや、逆に合音表記が期待されるところが開音表記になっているもの、あるいは、開合の記号が脱落したり、過剰に付けられたりしたものなどをいう。

混乱用例はまず、語種により分類し、さらに、「開音表記であるべきものが合音表記となっている語」、「合音表記であるべきものが開音表記となっている語」、「其の他」の三つに分けた。その結果をまとめると、〈表一〉のとおりである。

『日葡辞書』の見出し語の中、オ段長音の開合と関係のあるものの約4%が開合表記の混乱を見せており、また、これは全体見出し語の約0.8%に該当するものである。規範性の強い辞書において、これほどの表記の揺れが見られることは注目すべきである。

オ段長音開合表記の混乱用例を語種の面から見ると、漢語の方が和語の5倍以上も多く表記の混乱を見せている。このような現象は『天草版平家物語』*3や『天草版伊曾保物語』*4においても同様である。この点について、大塚光信(1982)は「他との連繋をほとんど持たない、単一の知識にだけ頼らざるをえない漢字音のごときが、正しく表記するのもっとも困難なものとして浮かびあがる」としている。日本語の中に長い間存在してきた和語の方が、新しく導入された漢語に比べ、もとの形を守りやすかったのであろう。

次は、開合音の統合の方向から考察結果を考えてみると、合音が開音として表記されているものが121例、開音が合音として表記されているものが83例で、前者が後者

〈表一〉『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱用例

	和 語	漢 語	合 計
開音→合音	12	71	83 (32%)
合音→開音	23	98	121 (46%)
其の他	8	50	58 (22%)
合 計	43 (16%)	219 (84%)	262

*3 『天草版平家物語』のオ段長音開合表記の混乱用例

	和 語	漢 語	合 計
開音→合音	6	23	29
合音→開音	17	28	45
其の他	0	3	3
合 計	23	54	77

江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本及び総索引』明治書院

*4 『天草版伊曾保物語』のオ段長音開合表記の混乱用例

	和 語	漢 語	合 計
開音→合音	0	7	7
合音→開音	2	8	10
其の他	0	1	1
合 計	2	16	18

京都大学文学部国語学国文学研究室編(1963)『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語』京都大学文学会

の約1.5倍を示している。この点に関してもやはり、『天草版平家物語』や『天草版伊曾保物語』も同様の傾向を示している。

今度は、和語用例についてみる。和語用例はさらに、活用形に関係あるものと関係ないものとに分けることができる*5。その内容を以下の表に示す。

活用形に関係ない用例は、Banjōvarō (Banjōvarō 番匠わらう)*6・Mattō 副詞 (Mattō 全う)・Nettō (Nettō ねつたう)・Xiuō 副詞 (Xiuō 咨う)、Youō 副詞 (Youō 弱う)、Decō 副詞 (Decō でこう)・Tōguiqi (Tōguiqi 遠聞)・Vchifōqe (Vchifōqe 打毫くる)・Vōvchi (Vōvchi 大内)の9語である。これを品詞別に分けると、名詞が3例、副詞が4例、感動詞が1例、そして動詞(語幹)が1例である。

この名詞用例の中、Tōguiqi、Vōvchiは、オ段音に-uが続くところで、長音表記を取り、しかもその表記が誤っているわけである。しかし、『日葡辞書』にはこのようなものが、すべて長音化した表記をとっているわけではない。この点については、次節でまとめてみたいと思う。

また、Mattō、Nettōなどの類を見ると、これらは、形態的には形容詞ウ音便形をとっているが、副詞という品詞の規定がされてあるものもあれば、そうでないものもある。また、Nettōは、その語義から考えると感動詞と分類されるべきものと思われる。しかし、どのような基準によって、副詞という品詞の規定をしたのであろうか。この点についても、次節で詳しく考察する。

活用形に関係ある用例は26例である。開音が合音と表記されているものは、Ca-qisusami、u、ōda (ōda 書きささむ)・Narabi、u、ōda (ōda 並ぶ)・口ずさむ・暗む・はばむ・伏し拝む・思いすさむの7語である。また、合音が開音と表記されているものは、Cacomi、u、ōda (ōda 囲む)・Yorocobi、bu、cōda (ōda 喜ぶ)・青む・掻い込む・掻い転ぶ・恋ひ偲ぶ・走り飛ぶ・掘り込む・吹き込む・伏し転ぶ・持ち運ぶ・目論む・打ち頼む・うどむ・押し込む・及ぶ・疎む・呼び込む・読(詠)むの19語である。

この用例を通して注目を引くのは、まず、用例のすべてが動詞の音便形であるということである。活用形に関係ある用例として表れる可能性を持つものには、ア・ハ・ワ行四段動詞の終止連体形、ア・ハ・ワ・バ・マ行四段動詞の音便形、形容詞連用形

〈表二〉『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱した和語用例

	活用形に関係ない	活用形に関係ある	合 計
開音→合音	5	7	12
合音→開音	4	19	23
其の他	5	3	8
合 計	14	29	43

*5 用例の分類は、大塚光信(1982)参照

*6 以下、用例をあげる際、()の中は、期待される表記と『邦訳日葡辞書』による訳語を示す。品詞規定は、当辞書本来のものである。

の音便形、そして、未然形にウの下接したものなどがある。この中、未然形にウの下接したものとは、辞書の見出し語としては表れないものである、本稿の考察の範囲からは除外される。形容詞連用形の音便形については、副詞として認めているかどうかなど、『日葡辞書』における取り扱い方の問題を含んでいる。本用例の中の、形容詞ウ音便形の形をとるものは4語であり、その中、3語は副詞という品詞規定を持ち、1語は語義上、感動詞と分類したわけである。ア・ハ・ワ行四段動詞の終止連体形の混乱用例が見えないのは、終止形の性質によるものであると思われる。これは、『天草版平家物語』や『天草版伊曾保物語』でも同様である。終止形は、他の活用形に比べ、実際の文章や日常生活で使われる言葉においては、その使用頻度が低い。そして、音便形などに比べ、開合表記を含む場合が少ない。そのため、相対的にもとの形を守りやすかったのであろう。このような終止形の特徴がキリシタン文献にも反映されているものと考えられる。

また、26の中、16用例が複合動詞であるということに気づく。特に、「一すさむ」が3例、「一込む」が4例である。しかし、これらの複合動詞の後項動詞は、単独の場合は、その表記の混乱を見せていない。これは、単純な表記の間違いであったのだろうか。しかし、そう考えるには用例の数が多いわけである。あるいは、複合動詞の後項動詞であるから生じる、表記の困難さらしきものがあつたのであろうか。

もう一つ注目しなければならないのは、この用例には、ア・ハ・ワ行四段動詞の例はなく、バ・マ行の用例だけが見られるということである。これは、音便形を作る際の両動詞の間の何らかの相連に起因するものであると思われる。この点に関しても、節を改めて考察する。

次は、漢語用例である。漢語用例は、全部で219例が表れる。この中、二語以上の用例で表れ、開合表記の混乱を見せている漢字は、開音が合音表記となっている語では、「長・香・堂・羊・納・悩・双・明・草・江・法」の11字で、用例数は71語である。合音が開音表記となっている語では、「甲・法・厚・動・宝・方・調・条・業・葉・朝・妙・樓・小」の14字で、98語の用例を持つ。この中、注目すべきは、やはり一字において、意味に因る開合の別を持つものである。「方」「法」「甲」などがその代表的なものである。これに関しては、文献での記事や、多くの先行研究^{*7}があるので、ここでは簡単に述べておく。

まず、「方」は、方向を意味する時には、「Fô」のように開音と表記し、平方形を意味する時には、「Fô」のように合音と表記する。Fôdate(Fôdate 方立)・Fôsun(Fôsun 方寸)・Fôyen(Fôyen 方円)・Yofô(Yofô 四方)・Yofôbaxira(Yofôbaxira 四方柱)・Yofôbon(Yofôbon 四方盆)のような用例がある。「法」は、法則・規定・命令などの意で用いられる場合は、「Fô」であり、仏法あるいは教義を意味する場合は、「Fô」のように表記する。開音が合音と表記されている用例としては、Feôfô(Feôfô 兵法)・Fiôfô 1. feôfô(Fiôfô または、feôfô 兵法)・Giôfô(Giôfô 定法)・Qefô(Qefô 家法)の4例があり、合音が開音と表記されている例としては、Cobôxi(Cobôxi 小法師)・

^{*7} 『日本大文典』、『音曲玉淵集』、池上禎造(1960)、中村通夫(1961)、沼本克明(1972)、森田武(1993)など参照

Denbō (Denbō 伝法)・Fōuō (Fōuō 法皇) がある。そして、「甲」は、物の順序・上下の意では「Cō」であるが、物の背面を意味する場合は「Cō」と表記して、それぞれ意味による開合の別を持つものである。BECcō (BECcō 龜甲)・Cōfixigui (Cōfixigui 甲拉ぎ) がその例である。

最後に、「其の他」のところで考察した用例は、オ段長音開合表記の混乱の様相がより複雑なものである。例えば、Caifacarai、ō、ota (ōta 掻い計らふ)・Vomonji (Vomonji 大文字) のように、開合記号が脱落したものが32例ある。これは長母音と表すべきところが単母音と表記されているものである。また、Cogoxō (Cogoxō 小御所)・Vōdōxi (Vōdōxi 威し) のように、開合の記号が過剰に付けられたものが14例あり、これは、逆に単母音であるべきものが長母音となっているものである。さらに、Sōdō (Sōdō 騒動) のように、開合の混乱が1語において2回も表れているものが4例あり、開合記号と on とが交替して表れている、Ami、u、onda (ōda 編む) のようなものが3例ある。最後にこれらが重複して表れる用例が5例であって、合計58例である。「其の他」に属する用例の中には、単純な印刷上、あるいは表記上の誤謬と思われるものも少なくない。しかし、ここに属する用例は、ただオ段長音の開合の別の問題だけではなく、短母音であるべきものが長母音として表れたり、あるいは長母音が単母音のように表れたものなどがあって、開合表記の混乱という現象が、ただオ段長音に限られた問題ではなく、広くは日本語の母音体系にまで影響を与える音韻現象であったことを示している。

III. 『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱用例の周辺

1. 名詞用例から：オ段音に－UOが続く場合の表記について

前述したように、ここでは、『日葡辞書』におけるオ段音に－UOが続く場合の表記について、まとめてみたいと思う。周知のごとく、オ段の合直長音は、その変化をみると、二通りのものがある。一つは、－ou 形であって、オ段音にウが付いてできたものである。つまり、オ段の仮名にウヤフが接したものである。もう一つは、－ouo 形である。これは、オ段音に [wo] の音が続いたもので、つまり、オ段の仮名にオヤホヤフが接したものである。ここで問題にしているのは、二番目の－ouo 形のことである。この－ouo 形に属するものは、『日葡辞書』での表記が一定していない*8。それを表記の様相別に分類すると、以下の五つに分けることができる。

- ① 長音化しないで－ouo 形を保っているもの
- ② 長音化し、－ō と表記されているもの
- ③ 同じ語に－ouo 形と－ō 形とが併存しているもの
- ④ 単独では－ouo 形であるが、複合語では－ō 形を見せているもの
- ⑤ その他

①の具体的な例を挙げると、次のようなものがある。これらは、諸活用形や名詞形、

*8 森田武 (1993) 参照

そして複合語に至るまですべて－ouo と表記されている。

Touori, ru, otta (通り、る、った)

Vouoi (多い)

Vouoi, uô, uôta (覆い、ふ、うた)

⑤の例には、次のような例が挙げられる。

Fô (頬) Vôcame (狼)

Vôqij (大きい) Vôxe (仰せ)

⑥は、同じ語に－ouo 形と－ô 形とが併存され、2 回にかけて見出し語になっているものである。「郡」と「氷」とが、その例である。

Couori (郡) Côri (郡)

Couori (氷) Côri (氷)

次は、普通は長音化していない－ouo 形であるが、複合語の一部において長音化した形、つまり－ô と表記されているものがある。

Touo (十) → Tôca (十日)

Touoi (遠い) → Tôguiqi (Tôguiqi 遠聞)

最後に、その他と称したものは、一語に対して、－ô 形と－ouo 形、そして単音節という三つの表記をとっている、「弟」である。

Vototo・Votôto・Votovoto (弟)

オ段音に続く－uo とは、仮名表記にすると、オ・ホ・ヲのいずれかである。このオ・ホ・ヲの発音に関しては、当時、すべてヲの発音、つまり [wo] であったが、近世に入って今日と同様、[o] になったという*9。これに従えば、『日葡辞書』に見える－ouo 形が－ô と表記されているのは、通説から見ると、少々早い例である。これから考えると、当時、オ・ホ・ヲの発音がすべてではないにしても、[o] に変化し始めていたことを示すものと思われる。

2. 副詞用例から：形容詞ウ音便形の取り扱い方について

『日葡辞書』では、もとの形容詞とは別に見出し語として独立している場合においても、また、形容詞の下に派生形として名詞形とウ音便形を記録した場合においても、その音便形に副詞と記録されているものもあれば、そうでないものもある。それではどのような基準によって、品詞を書いたり書かなかったりしたのであろうか。それを究明するため、『日葡辞書』に収録されている形容詞、約 380 語を、派生語、つまり名詞形、ウ音便形—あるいは副詞形—の取り扱い方と、ウ音便形における品詞規定の有無という点に注目して以下の七つに分類し、『日葡辞書』の形容詞の取り扱い方について考察する。便宜のため、見出し語は線で表し、派生形は小文字で表す。

①形容詞原形：111 例

②形容詞原形 派生形：204 例

③形容詞原形・ウ音便形：53 例

*9 佐藤喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』明治書院 p.233

④形容詞原形 複形・ウ音便形：4 例

⑤形容詞原形 複形・一ク形：1 例

⑥形容詞原形・一ク形：2 例

⑦一ク形あるいはウ音便形：5 例

④類は、形容詞原形だけが見出し語となり、その下に、派生形の記録がないものをさす。

Adacai (あだかい)

Catai (固・堅・難い)

Faregamaxij (晴れがましい)

Tevomoi (手重い)

この④類に属する例には、いくつかの類型が見られる。

まず、最初にあげた Adacai のように、現在は使われないものと、Catai のように、現代日本語においても使用頻度が高いものとに分けられる。

また、Gamaxij の前に名詞や形容動詞の語幹などが付いて作られた形容詞、12 語がある。上記の Faregamaxij 以外に、角・調法・口・恥ぢ・人・物・追従・手・幼・恐(畏)れ・油断などが gamaxij と結び付いて形容詞となっている。

そして Gamaxij の場合とも関連するが、形容詞に名詞が接頭語として結ばれたものである。これに属する名詞として、心(4 例)・口(5 例)・耳(2 例)・物(3 例)・手(6 例)などがある。

最後に、形容詞の語幹が疊語になっているものの類である。Ateatexij(当て当てしい)・Cadocadoxij(角々しい)・Yosoyosoxij(余所余所しい)などがあって、全部で 10 語の例がある。

次は⑤類である。⑤類は、形容詞原形だけが見出し語となり、その下に派生形記録があるものである。ウ音便形に副詞と記録されているものもあり、そうでないものもある。

Arigatai (有難い)

Qetacai (気高い)

Arigatasa (有難さ)

Qetacasa (気高さ)

Arigatō (有難う)

Qetacō (気高う) 副詞

この 2 例のウ音便形の右をみると、一つは、副詞と書かれているのに対して、もう一つは何も書かれていない。これを全体的に見ていくと、⑤類に属する用例、合計 204 例の中、ウ音便形に副詞と記録されているものは、21 例、約 10%にあたる。しかし、副詞という規定があるものとなないものとの間にははっきりした相違は見られない。

⑥類は、形容詞原形とウ音便形とがともに見出し語となっているが、形容詞原形の下には、派生形の記録はないものである。見出し語となったウ音便形には、副詞という品詞規定があるものもあり、そうでないものもある。このウ音便形の中、43 例、約 80%には副詞という品詞の規定が見える。

Chijsai (小さい)

Cotofiroi (事広い)

Chijsō (小さう) 副詞

Cotofirō (事広う)

しかし、次の⑦類は、形容詞原形とウ音便形とがともに見出し語となり、さらに、その形容詞原形の下には、名詞形とウ音便形とが書かれている。そして見出し語になっているウ音便形には、すべて副詞と記録されている。しかし、原形の下のウ音便形の

ところには副詞という記録はない。

Acai (明い)

Acasa (明さ)

Acõ (明う)

Acõ (明かう) 副詞

この㊦類に属するものは、上記の Acai (明い) と Atçui (厚い)・Nagai (長い)・Vramesij (恨めしい) の4例に過ぎない。

以上から考えると、ある形容詞が原形に比べてウ音便形として頻繁に用いられ、そのウ音便形の連用修飾用法がより特化された場合、『日葡辞書』の編者はこれを副詞として規定したのではないかと考えられる。しかし、これは他の語に対する品詞規定を調べた上で、ともに考察する必要があると思う。なぜならば、『日葡辞書』全体にきちんとした品詞規定がなされた上で、形容詞ウ音便形に限って品詞規定のばらつきが見えるのであれば、形容詞に限る問題になる。しかし、逆の場合は、『日葡辞書』自体が、品詞規定にはあまり注意をはらっていなかったことになるからである。

上記の分類に戻って考えてみると、やはり㊦類の方がウ音便形の独立性が強いと思われる。㊦類に属する語は、形容詞原形自体も使用頻度が高いものである。また、ウ音便形が連用修飾の用法で広く使われていたので、別の見出し語として立てる必要があったと思われる。㊣類も㊦類と同様、ウ音便形の独立性は認められるが、もとの形容詞原形が㊦類のそれに比べ、使用頻度が低かったのではないと思う。

また、㊣類において注意を引くのは、和語用例の中、活用形に関係ないものの用例として挙げられた副詞用例の四つが、すべてこの㊣類に属するものであるという点である。

『日葡辞書』に収録された形容詞の中、50%以上が㊦類に属する。つまり、形容詞原形の下に名詞形とウ音便形とを記録してはいるが、ウ音便形を別の見出し語として立ててはいないものである。㊦類の形容詞は、㊣・㊦類に比べ、ウ音便形が用いられる場合が相対的に少なかったのであろう。

最後に、類型㊥・㊦・㊧について見る。㊥類は、形容詞原形と一ク形とがともに見出し語となり、形容詞原形の下に、派生形の記録がある。一ク形にも副詞という記録があるもので、用例は1例しかない。㊦類は、形容詞原形と一ク形とがともに見出し語となっている。形容詞原形の下に派生形の記録はなく、一ク形には副詞と記録されているものである。㊧類は形容詞原形はなく、一ク形やウ音便形が見出し語となっているものである。副詞という記録もあるもので、5例がある。

㊥類 Amanei (遍い)

Amanesa (遍さ)

Amaneõ (遍う)

Amanequ (遍く) 副詞

㊦類 Tcutcumaxij (慎ましいい)

Tcutcumaxiqu (慎ましく) 副詞

Yumeyumexij (夢々しい)

Yumeyumexiqu (夢々しく) 副詞

㊦類 Axitatō (朝疾う) 副詞

Fodonō 1. fodonacu (程なう または、程なく) 副詞

Ironico (色にくう) 副詞

Teitacu 1. teitō (手痛く または、手痛う) 副詞

Teitō (手痛う) 副詞

Vomoxirovocaxū (面白をかしう) 副詞

この㊥・㊦・㊧の例は、形容詞の副詞形がウ音便形とーク形とが併存していることを見せるものである。『日葡辞書』の用例だけでは、形容詞の副詞形の変化の様子を明確にすることはできない。しかし、ーク形の用例が多くないことから考えてみると、この時期において、形容詞の副詞形としてーク形より、ウ音便形の方が多用されていたのではないと思われる。

3. 動詞用例から：バ・マ行四段動詞の音便形にだけ用例が見られることについて

『日葡辞書』において、オ段長音開合表記の混乱をみせる活用形に関係ある用例が、すべてバ・マ行四段動詞の音便形であることは、前述したとおりである。その中でも、マ行の用例が18例で、バ行の用例が8例である。特にマ行の場合は、『日葡辞書』に載っているマ行四段動詞、178語の中、約10%が音便形において開合表記の混乱を見せているということは、注目にあたいする。

このように、ア・ハ・ワ行四段動詞の場合は、音便形の混乱例が見えないが、バ・マ行の場合に限ってその混乱例が見えている現象を説明していくためには、両方の動詞の間に何かの相違があるのではないかと、疑ってみる必要がある。

まず、比較の便宜のため、ア・ハ・ワ行四段動詞、バ行四段動詞、そしてマ行四段動詞の例をいくつか挙げる。その際には、音便形が-au、つまり-ōになる場合と、-ou、つまり-ōになる場合と、その他の場合とに分けて挙げる。

ア・ハ・ワ行四段動詞

1. 音便形が-ō形であるもの

Niai、ō、ōta (似合ふ)

Tagai、ō、ōta (違ふ)

2. 音便形が-ō形であるもの

Niuoi、ō、ōta (匂ふ)

Sasoi、ō、ōta (誘ふ)

バ行四段動詞

1. 音便形が-ō形であるもの

Manabi、u、ōda (学ぶ)

Susabi、bu、ōda (すさぶ)

2. 音便形が-ō形であるもの

Corobi、u、ōda (転ぶ)

Facobi、u、ōda (運ぶ)

3. 音便形がーδ形でもーδ形でもないもの

Musubi、u、unda (結ぶ)

マ行四段動詞

1. 音便形がーδ形であるもの

Asami、u、ōda (浅む)

Chinami、u、ōda (因む)

2. 音便形がーδ形であるもの

Nomi、u、ōda (飲・呑む)

Tanomi、u、ōda (頼む)

3. 音便形がーδ形でもーδ形でもないもの

②Fazzumi、u、unda (弾む)

Nusumi、u、ūda (盗む)

①Carumi、u、ūda (軽む)

Nicumi、u、ūda (憎む)

Tacumi、u、ūda (工・巧む)

③Ami、u、onda (編む)

バ行の場合は、ーδ形とーδ形、そして撥音形の三種類があるだけで、ウ音便形は見えない。マ行の音便形には、五種類がある。オ段長音の開音表記を用いるものと、合音表記を用いるもの、そして、撥音便形とウ音便形、また、最後の「Ami、u、onda」の場合は、「ōda」のように表記されるべきところが「onda」のようにになっているものもある。これも単純な誤植ではない*10。

この音便形の開合表記の混乱の問題を、『日葡辞書』の見出し語の並べ方からも考えてみたい。ア・ハ・ワ行の場合は、終止形も過去形もともにオ段長音開合の表記を用いる。しかも、当然同じ表記である。従って、終止形が正しく書かれていれば、音便形はその終止形の表記をそのまま書いていけばよいわけである。それゆえ、ア・ハ・ワ行四段動詞の場合は、終止形においても、音便形においても相対的に表記の混乱例が表れにくかったと思う。これに対して、バ行やマ行四段動詞の場合は事情が少し違う。両方ともに、終止形はすべてーuであってオ段長音の開合の表記を含まない。が、前述したように、音便形は、ーau 形の場合はーδに、ーou 形の場合はーδになる。また、ーeu 形になる場合はーeō のように拗合長音の表記を用いる。そして、ウ長音の形を用いたり撥音便になったりする。そのため、ア・ハ・ワ行四段動詞に比べ、その形の正しさを確認する機会が少なくなるので、それだけ正しくない表記になる可能性も大きくなったのではないと思われる。

また、音便形が作られる際の音素脱落の負担の差という点も考えられる。以下、動詞の連用形がウ音便形を作る過程を示す。

ア・ハ・ワ行四段動詞

違ふ: Taga\ + ta → Tagauta ⇒ Tagōta

*10 森田武 (1980) 参照

匂ふ：Niuo^hi+ta → Niuouta ⇒ Niuô^hta

バ行四段動詞

学ぶ：Manah^hi+ta → Manauta ⇒ Manô^hda

転ぶ：Coroh^hi+ta → Corouta ⇒ Corô^hda

結ぶ：Musuh^hi+ta → Musunta ⇒ Musunda

マ行四段動詞

浅む：Asah^hi+ta → Asauta ⇒ Asô^hda

飲む：No^hh^hi+ta → Nouta ⇒ Nô^hda

盗む：Nusu^hh^hi+ta → Nusunta ⇒ Nusunda

巧む：Tacuh^hi+ta → Tacuuta ⇒ Tacô^hda

上記の過程をみると、ア・ハ・ワ行の場合は、/i/ という母音だけが脱落するのに対して、バ・マ行の場合は、/m/・/i/・/b/・/i/の子音と母音の二つの音素が脱落する。従って、バ・マ行のウ音便形を作る時よりは、ア・ハ・ワ行のウ音便形を作る時の方が、音素の脱落による負担が少ない。

このように、ウ音便形を作る時の音素脱落による負担も少なく、『日葡辞書』での見出し語の挙げ方において、終止形とウ音便形との間に統一性を持っていたア・ハ・ワ行四段動詞の方においては、開合表記の混乱が表れにくかったのに対して、バ・マ行四段動詞の場合は、相対的にその混乱が起こりやすかったと思われる。

IV. まとめ

以上、『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱の実態と、その用例をめぐって見られる表記面での特徴などについて考察した。その内容を以下にまとめる。

- 1) 『日葡辞書』のオ段長音開合の表記と関連のある見出し語の中、約4%にあたる262例が表記の混乱を見せている。
- 2) 漢語用例が和語用例の5倍以上も多く表れている。
- 3) 合音が開音と表記されている場合が、逆の場合の1.5倍を示している。
- 4) 開音が合音と、合音が開音と表記されたものだけではなく、開合記号の脱落・過剰、開合記号とonとの交替など、複雑な様相を見せている。
- 5) 名詞用例からは、オ段音に—uo音が続く場合の『日葡辞書』の表記が一定していないことに注目し、表記の類型別に五つに分類した。
- 6) 副詞用例からは、『日葡辞書』の形容詞ウ音便形の取り扱いに注目し、形容詞380語を、派生形の記録有無と副詞という品詞規定の有無によって七つに分類し、考察した。その結果、ある形容詞が原形に比べてウ音便形として頻繁に用いられ、そのウ音便形の連用修飾用法がより特化された場合、副詞として規定したのではないかと考えられる。
- 7) 動詞用例は、ア・ハ・ワ行の用例は表れず、バ・マ行四段動詞の音便形の用例だけが見られる。これは、音便形を作る際の音素脱落の負担と、終止形と音便形の間の表記上の統一性から起因するものと考えられる。

〈参考文献〉

- 池上禎造 (1954) 「言語生活の一意義」『国語国文』23-4
(1960) 「「方」の字の合音用法」『島田教授古稀記念国文学論集』関西大学国文学会
- 石塚晴通 (1976) 「パリ国立図書館本日が辞書解題」『パリ本日葡辞書』勉誠社
- 岩淵悦太郎 (1977) 「オ段長音における開合について — 法華経随音句における記載を中心として」『国語学論集』筑摩書房
- 遠藤潤一 (1968) 「日葡辞書に見える語意識の解釈」『国学院雑誌』69-4
(1970) 「日葡辞書の国語から — ク活用形容詞の記述的側面について — 」『国学院雑誌』71-3
(1971) 「日葡辞書編者の形容詞観」『国学院雑誌』72-5
- 大塚光信 (1955) 「バ四・マ四の音便形」『国語国文』81
(1982) 「開合音 — キリシタン版の表記をめぐる — 」『文学』50
- 川上 葵 (1980) 「アプからオーまで」『國學院雑誌』81
- 亀井 孝 (1962) 「オ段長音の開合の混乱をめぐる一報告」『国語国文』31-8
(1963) 「オ段長音の開合の混乱をめぐる一報告補訂」『国語国文』32-5
- 岸本恵実 (1998) 「ハ行四段動詞アウの発音」『国語国文』67-8
- 小松英雄 (1981) 『日本語の世界 7 日本語の音韻』中央公論社
- 都竹通年雄 (1968) 「アウ・オウからオーへ」『近代語研究第二集』武蔵野書院
- 土井忠生 (1955) 『ロドリゲス日本大文典』三省堂
- 豊島正之 (1984) 「「開合」に就て」『国語学』136
- 中村通夫 (1961) 「寛永醒睡笑におけるオ段長音の開合かなづかいについて」『国語学』44
- 沼本克明 (1972) 「「厚」の開合について」『国語国文』41-1
- 橋本進吉 (1928) 『キリシタン教義の研究』東洋文庫
- 浜田 敦 (1951) 「長音 (上) (下)」『人文研究』2-5、2-6
(1955) 「国語音韻体系における長音の位置 — 特にオ段長音の問題 — 」『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店 (1983) 所収 (初出『国語学』22)
(1975) 『三浦庚妥著 音曲玉淵集』臨川書店
- 飛田良文 (1992) 「連母音「ア・ウ」の成立」— 同著『東京語成立史の研究』東京堂出版所収
- 森田 武 (1993) 『日葡辞書提要』清文堂出版
- 柳田征司 (1985) 『国語学叢書 5 室町時代の国語』東京堂出版

(お みよん・北大大学院博士課程)